

〈会員の広場〉

## 第 5 回 UEJ 「大学開放」研究会の報告

NPO 法人全日本大学開放推進機構 研究員 香川重遠

今回の研究会には 14 名の大学関係者の参加があった。

### 1. 出相氏の報告：「大学コンソーシアムにおける生涯学習事業推進上の課題」

報告の詳細に関しては、出相氏のレポートを参照していただきたい。

京都コンソーシアムは加盟大学も多く、大学生のインターンシップや単位互換などでは成果も得られているが、そこには生涯学習の視点が欠けているのが現状でもある。京都の各大学が加盟しているコンソーシアムにしかできない、京カレッジをより発展させた専門的な大学ジョイント形式の公開講座を創造するチャレンジをしてみるとというのが、京都コンソーシアムにも生涯学習の視点を活かし、ひとつの特色を追加していくことができるのではと思いました。

そのためには京都コンソーシアムに、生涯学習に特化した職員の配置が望まれていくことにもなるであろうし、これまでになかったことに挑戦するには、莫大なエネルギーが必要ともされる。こうした部分は組織上の課題とも重なるので、すぐに実現できるとは思わないし、難しい点もあるだろうが、京都コンソーシアムの存在意義をより強化するためにも、今後の方向性の一つに加えられればとも思いました。

### 2. 共同討議

共同討議では参加者から、公開講座においてどのように講座の質（レベル）を保証するか、という議題上がった。

大学教育ではシラバスにそれぞれの科目について、具体的な内容や要点、準備学習や到達目標、参考図書や履修の要件などが記載してあり、その科目のレベルが相対的にも絶対的にも受講生に理解しやすい。また、専門科目においては、それぞれの学年ごとに履修する講義がカリキュラム上で体系的に出来上がっているために、その科目が基礎に当たるものであるのか、発展に当たるものであるのかも理解しやすい。

しかし、公開講座のカリキュラムの場合は社会人である受講生の能力が多様であり、かつ体系的な履修を踏まえていないために、どうしても「一般教養」や各学部の「共通科目」といった基礎のレベルに収斂しがちである。それではより深く学びたいという受講生のニーズに応えることができないために、受講生の公開講座離れを招いていることも考えられる。

こうした議題を受けて、会場からは、大学によっては科目にナンバーをつけることによって、科目の水準や履修条件をナンバリングで表しているところもあるが、そのような方式を公開講座に取り入れ、受講生に示していく必要性の指摘もあった。一方で、公開講座の事務職担当者からは、そのような方式の重要性も理解できるが、まず受講生を幅広く集める上では、どうしても基礎的な講座を準備しないと集客が難しい。一方で、そうした基礎的な講座では受講生に飽きられて、結果として、受講生集めに苦心するという、営業的なジレンマも指摘された。

方法の一つには、どこの大学の公開講座もアンケートをとっているとは思いますが、その質問内容の取り方に変化をつけていくことが必要ではないかということと、講座を担当する教員が受講生を観察し、教員自身もこの課題を真摯に受け止める意識改革が必要であり、今日では大学の教員を多忙であるが、公開講座のカリキュラム作りに工夫を考える必要がある。

また、専門的に深く学んだのであれば、それを証明する修了書の配布や、その知識を生かせるような場に関する情報提供や、学外でのステップアップの道筋までも考えていく必要があるかと思われる。この課題は今後の大学開放における公開講座のあり方を考える上で、重要な位置を占めており、これからの公開講座をより発展させ、真の意味での大学開放を実現していくために真剣に取り組むべき課題であると考えさせられた。